広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	表現力・思考力を育てるために（2013年）
Author(s)	浜本，純逸
Citation	国語教育思想研究 , 27 : 80 - 82
Issue Date	2022-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053351
Right	
Relation	

表現力・思考力を育てるために（2013年）

浜本　純逸

はじめに―全国学力調査のあり方―

全国学力調査が、子ども・学校・地方自治体の学力比較に使われるのは日本の教育の発展のためにはよくない。比較のための学力調査は競争意識を生み、そのための準備教育が始まる。学校で育てる学力が調査問題解答のための教育に陥るおそれがある。生活に役立つ「ほんとうの学力」を育てる日本の国語教育にはならないであろう。<将来の生活に生きてはたらく国語学力〉を育てる学力調査でありたい。そのためには、抽出調査が望ましい。

社会科や理科などの他教科においても「言語能力」が学習の基盤になっている。また、これからの情報化社会では言語による思考力が生活を豊かにしていく大きな力となっていくであろう。

表現力・思考力の指導には言語活動の場を豊かに取り入れることができる単元的展開を試みたい。言語活動を中心にした学習指導は、一般に学校や地域によってバラツキがあるようである。同僚のおしゃべりや校内研究会、地域の研究会等を通して知恵を出し合い成果を分けあって指導していきたい。

表現力を育てる

1　横書きの手紙書式

手紙文を書く力に関しては、これからの言語環境の変化を考えると手紙の書式を詳しく教えなければならないのだろうか、という疑問を持っている。依頼状、案内状などは横書きが多くなるであろうし、相手の名前を書く位置などの形式も変化していくであろう。そうなるとメールを使った簡潔な横書きの手紙形式を教えることも必要になってくるであろう。心のこもった見舞い状の書き方は中学校で教えたい。

2　表現力の指導

話すこと・書くことに関しては、指導内容として重視されるようになってきたが、さらに指導を充実させていく必要がある。国語 B2「立場や意図を明確にして話し合う」問題では、「二 質問をしたいことを書く」問いに対する正答率は 52.9%である。「三 目的に沿って計画的に話し合う」問いに対する正答率は 52.5%である。いずれも他の領域の正答率よりも低い。音声による表現であれ文字による表現であれ、表現力を育てる指導にはさらに工夫して力を注ぎたい。

用語によるつまずき―基幹語彙と学習語彙―

1　設問の用語

学習者の中には設問や問題文の中の語句につまずいて正解に至らない学習者がいる。調査問題国語 A7 設問「①から④までを一文にまとめて書きます」に対する誤答は 24.1%である。『調査報告書』によれば、「一文の意味を理解していなかった」とある。文法用語の「語・文・文章」の違いを理解していなかったために「表現力」の得点が得られなかったのである。語彙指導が大切であることは言うまでもないが、教科書に出てくる新出語句や難語句のすべてを覚えさせる必要はない。必要なのは、基幹語彙と設問に使われるような学習用語である。

2　基幹語彙

基幹語彙とは、例えば、一年生教材の『おおきなかぶ』における「おおきい・ちいさい」は、この教材以外にも使われており他教科の学習においても使われる。このように、ジャンルや職域を越えていろいろな物事の説明や感情の表現に広く使われる語句の集まりである。

『おおきなかぶ』に「かぶ」という語は十三回出てくる。作品『おおきなかぶ』の理解にとっては重要であるが、この教材以外には使われていない。まして算数や社会科などの他教科で使われる語ではない。他教科でもよく使われる語句が基幹語句である。私は、国語科で教えたい基幹語句として、例えば調査問題 A1 にある「建築」とその

関連語(作り・仕組み・構造・構成・組織・制度、システム、等)、問題 B2 にある「活動」とその関連語(はたらき・仕事・作用・活用・影響・機能、メカニズム、等)などを想定している。

3　学習用語

学習用語とは、国語科学習の道具となる語句である。24 年度全国学力調査では、「質問」・「取材」・「会話文」・「慣用句」等の語句が使われている。従来、文法関連の語句が教えられてきたが、これからはそれに加えて、「論理的思考語句(分ける・くらべる・対比・類比・推論・具体・抽象・特殊・一般・根拠・原因・理由、等)」と「想像的思考語句(見る・直感・想う・場面・比喩・虚構・語り手・読者・視点・描写・心情の変化・同化・異化・イメージ・象徴・ファンタジー、等)」を意図的に取り出して身につけていくようにさせたい。

思考力を育てる

1　文学的思考

問題 A4 は文学作品『ないしょ』を素材としている。「場面の様子や登場人物の気持ちを想像しながら音読することができるかどうかをみる。」という出題の趣旨にふさわしい素材であり、設問の仕方も適切である。

ところで、この作品を教室で扱うならば、私は、文学的思考力を育てる学習材にもしてみたい。例えば、①「それがな、大豆なのじゃ。鳩に聞かれてはまずい。」という五助どんの答えを聞いて、「お百姓はどう思っただろうか」という設問をしてみたい。人物の心情を「想像する」経験をさせるのである。また、「この話が『笑い話』と言われるわけを話し合ってみましょう」という問いも出してみたい。作品全体を批評する力を養うことができよう。

2　論理的思考

「推論の力」を養うためには、例えば小学校二学年の場合、

a　カミキリムシは、大きくなると、するどい大あごでみきをかみきって、あなを空け、外に出てきます。人間が木にあなを空けるときは、ドリルという道具をつかいます。カミキリ虫の大あごは、ドリルと同じはたらきをしているのです。

a の文章を学習した後で b の文章を提示して、空欄に適切な語句を入れさせるような設問を考えたい。

b キリギリスのおすは、前ばねをこすりあわせて美しい声を出します。人間が［＿＿＿＿＿］を使うのと同じはたらきをしているのです。

a 文の思考形式に倣って「ドリル」に対応する語句(「楽器」)を b 文の第一文に基づいて類推し発見する力を養うのである。

文章に書かれている内容を再現させたり必要な情報を抜き出させるだけでなく、複数資料を根拠にして答えを推測し発見する思考力を養う調査問題も開発していきたい。

思考力発達のメカニズムを解明する

1　A 問題と B 問題とをクロスさせて考察する

全国学力調査の A 問題は、「基礎的・基本的な知識・技能が身に付いているかどうかをみる問題」であり、「何を習得しているか」を見る問題である。B 問題は、「基礎的・基本的な知識・技能を活用することができるかどうかを見る問題」であり、「活用力」をたしかめる問題である。全国学力調査の B 問題は、調査問題を通して「国語科で育てる生きて働く力」を具体的に示し、読解中心の古い国語科授業を変革してきた功績はおおきい。

これからは A 問題と B 問題とをクロスさせて考察することも試みたい。一人一人の子どもの解答において、A 問題と B 問題のそれぞれには国語力のどのような要素がどのように働いているのか、そして関連しあっているか、解明したいのである。

両問題の正答者(ア型)、A 問題のみの正答者(イ型)、B 問題のみの正答者(ウ型)、両問題の誤答者(エ型)、のそれぞれ約 10 名を抽出して回答をクロスさせて考察することによってその原因を究明してみたい。 A 問題(習得) 型国語力及びと B 問題(活用)型国語力の特質が明らかになり、発達における「習得」と「活用」の関連も明らかになるであろう。そのことによって、どのように言語活動(反復学習と応用学習)をさせれば、どのような

活用力が育つかという現場の関心・問題を解決する道筋を明らかにすることが可能になると思われる。

2　観点を発見させる

問題 A3 の「プレゼント問題」は、話し合う問題をマップにして共通理解を成立させようとしている。出された情報を関係づけて話し合う力を見ようとしている。この二つの設問の平均正答率は、86.5%である。問題 B2 の「部活動問題」は、部活動に関する質問を分類し、インタビューするときの内容と順番を決めさせようとしている。集めた情報を「まとまりごとに整理できる力」を見ようとしている。正答率は 63.3%で低い。いずれも情報を「関係づける力」を見ようとしているのである。A 問題より B 問題の方がでは「関係づけ」に働く思考の要素は質的に難しくなり複雑になっているのである。情報を「関係づける力」にはどのような要素があり、それらの難易度はどのようになっているか、などについて解明していきたい。

B 問題 2 では、

部活動の種類と人数に関する質問　種類・人数
部活動の曜日と時間に関する質問　曜日・時間
←観点

公平な話し合いにしよう
一つの考えにまとめよう
合わせた(同類の)発言を求めよう
司会者の意図
↑
観点

というように「関係づける(まとめる)観点」を示している。「関係づける」ことに必要な要素である「観点」を見いだす力が B 問題に働いていると考えられる。「視点」などの「関係づける要素」を見いだし、指導の方法を見いだしていくのが私たちの課題となろう。

3　A 問題にも B 問題にも「ねらいをもっていますか」という問い

A 問題 2「野生動物問題」は、「(質問) カードの内容は、どのようなねらいをもっていますか。」である。その正答率は 65.5%である。

B 問題 2 「部活問題」の三は、「白石(司会)さんの一部の発言は、どのようなねらいをもっていますか。」であり、その正答率は 52.5%である。

いずれも発言の「ねらいを明確に」とらえる力を見ようとしている点では共通であるが、正答率に 10%の差異が生じている。なぜであろうか。私は、A 問題 2 「野生動物問題」の易しさは、問題文中から答えを導き出せる「(動物の名前=具体例という)再現問題または言い換え問題」であることであり、B 問題 2 「部活問題」の難しさは、問題文における話し合いの流れ(文脈)を踏まえて司会者発言の意図を推測しなければならないことである、と理解している。

A 問題と B 問題をクロスさせて考察することによって、この再現思考から推測(推論)思考への飛躍のプロセスや発達のメカニズムの解明が可能になるであろう。

＊本稿における引用のすべては、文部科学省・国立教育政策研究所『平成 24 年度 全国学力・学習状況調査〈小学校〉報告書』平成 24 年 9 月刊、に拠る。

編集部注　初出
2013 年『教育時評』（学校教育研究所）NO.29